

アタックを拒ばむ増水と落石

— 青海千里洞くつ調査 —

水 晶 淳

地底の世界の大雪溪、
70メートルの大滝、大
広間、地底の風、摂氏4
度の低温、そしてその深
さ、これら全てが今まで
の洞窟の常識を破るもの
だった。それらを一体誰
が想像し得たであろうか。

8月15日から同29日
日に渡って、われわれ関
西大学探検部部員15名
は、日本最深の豎穴「青
海千里洞」を調査した。
われわれはここで過去2
年、3回にわたる青海千
里洞調査を含め、この度
の調査の概略を報告した
い。

○ ○ ○

40年8月・第1次調査
40年10月・第2次調査
41年11月・第3次調査
42年8月・第4次調査

見取図説明

- 1 入口
- 2 雪溪
- 3 孤独の滝
- 4 第1次調査
- 5 第2次調査
- 6 枢鳳の間
- 7 水でつた所
- 8 第五ホール
- 9 第3次調査
- 10 第六ホール

青海千里洞見取図

青海千里洞見取図

関西大学探検部作図

昭和42年9月日

1/1000

第4次調査行動記録

- 15日 出発
- 16日 ベース設営。
- 20日 一次アタックキャンプ設営。
- 22日 370メートル下降に成功。
- 24日 二次アタック開始。
- 26日 地底に大風。
- 29日 下山、解散。

8月16日

「暑い……」「テント場はまだか……」われわれがザックを背負って夏の太陽の降り注ぐ山を登り始めてからもう6時間になる。茂みに見え隠れしながら沢ともつかぬ道が、あえぎあえぎ谷間をよじ登っていた。福米口の石灰岩工場から青海千里洞のあるマイコミ平までの道なき道である。午後5時半を過ぎたころ、やっとのことでマイコミ平に着いた。われわれは前述の如く、過去3度の挑戦を挑んだ。しかし青海千里洞はわれわれを拒否し続け依然としてその姿を明かさずとはしなかった。そのため『今度こそ』という隊員の執な意気込みが、あくる日から十日間に渡る苦しい調査を遂行する大きな源動力になったことは疑えない。

8月20日

地底250メートルの地点に第1次アタック隊6名がキャンプを設営する日である。連日の予備入洞の疲れも見せず、彼ら(私は1次アタック隊には含まれていなかった)は、洞口に立った。ヘルメット、ヘッドランプ、カップに作業服、ゴム手袋に軍手、地下足袋という例の出で立ちであった。午前8時1人が入洞する。彼はわれわれが心を込めて作ったワイヤハンゴに足をかける。ザイルは上の仲間にはっきりと握られている。カタカ

タ、ハンゴが岩に当り、その音は洞窟に響する。そして彼の静止は洞窟を沈黙させる。突然、ガンという音が静寂を破った。落石だ、そしてまたカタカタ。ほっと胸を撫で下した。20分で65メートルを下ると、そこには大雪溪が流れるように描かれていた。彼はハンゴを離れ、メンバーがそろうのを待った。30分、1時間、2時間、まだ6名しか下っていない。中間点作業を受け持つ3名がまだである。このころから彼らは辺りの寒さに気が付き始める。摂氏4度。もう水で湿った足がジーンとしびれだしていた。大雪溪の横を通りぬけて下って行くと、小さな滝に出た。ハンゴをかけてさらに下る。地下水の流れがどこからともなく現われ、しばらく進むと眼前でブツッと、途切れていた。滝だ。昇降の際に、目己しか頼る音がない所から、われわれはこの滝を「孤独の滝」と呼ぶ。われわれは2度とも(3回目の下降に成功した)この滝に進行を阻まれた。冷水を浴びながら70メートルを昇降するには、あまりにも体力的にまた装備において貧弱であった由である。冷水と疲労を気力だけで破り、着いた所はアタックキャンプ設営予定地点の樞鳳の間(鳳は関大の意)であった。彼らはこの大ホールで23日まで過すのであった。装備は寝袋、着換、3日分の食糧と2日分の予備食、ガソリン、ハンゴ、測量器具だけである。テントは持ち込まなかった。しかしこのことが、彼らに洞内生活の最悪の条件を与えようとは誰も思っていなかった。温度100パーセントの洞内では湿ることはあっても決して干かない。まして滝を運ぶのであるからどんなに密閉しても水が入る。そしてテントがないので天井の岩から落ちる滴は、直接彼らの寝袋を濡らした。彼らは2泊3日をずぶ濡れで摂氏4度の寒さと戦うことを余儀なくさせられた。

8月22日

第1次アタック隊は、最深部へのアタックを開始した極風の間から続く200メートルの横穴を通り、第3次調査の時の最深部(290メートル、第5ホール)に達した。そこからハンゴを降り、さらに記録を更新しようというのである。希望に寒さを忘れ、20メートルのハンゴを1段1段階みしめながら下った。ホールだ(第6ホール)。しかしまだ底ではなかった。水の流れは足元の闇に消えていた。それより下は途中まで4~5メートル単位の階段状の堅穴が続き、ロック・クラimbingの要領で下降するのだが、頭から冷水を浴びて手足がしびれ行動が非常にぶくなっていった。ハンゴなしでは行動性を欠くので第6ホールからのハンゴにさらにハンゴをつないだ。この時、もはや冷水との戦いで気力体力に限界がきていた。悪条件下の洞内生活が彼らには大きくひびいていた。

8月23日

朝、昨日の地点より下を調査しようと勇んで出発した。しかし再度の挑戦も空しかった。次のホールまでは、手持ちのハンゴでは届かなかった。孤独の滝の7メートルの下部を切り離して持って来なくてはならない。1次アタックでは無理だ。なぜなら隊員にとって、悪条件下の洞内生活は、もう限界であった。彼らは足元に歯を濡えた洞窟を、執念に燃えた目でにらむばかりであった。しかし彼らはすでに青海千里洞から370メートルという驚異的な数をむしり取っていた。彼らが出洞したのは、23日午後8時、入洞してから60時間を経ている。以下のアタックは2次のアタック隊にバトンが渡された。

8月25日

2次アタック隊としてわれわれ5名は入洞した。1次アタックの経験からテントを持ち込み、ガソリンも倍に増した。アタックテント内の生活は確

かに快適であった。しかしそれもつかの間であった。われわれは250メートルの地底の世界で新潟地方を襲ったあの豪雨に直面した。午後6時のことであった。トランシーバーによる雨天の連絡が上からあると同時に70メートルの地底の滝は落石を伴って増水し始め、時が経つにつれて水量は増していった。もはや、洞内に響く楽しい歌声は聞かれなかった。それどころか不安は胸を駆け巡り口から出る歌を殺し、アタックテントを沈黙と恐怖の世界に落し入れた。もはや、われわれは地上には戻れなくなっていた。地底250メートルの世界で完全孤立した。誰もテントから出てみようとはしなかった。まるで不運な結果を宣告されることを、少しでも延そうとしているかの如く思われた。もう寝よう。滝や落石の音を聞いていると気がめいるばかりだ。寝袋にもぐり込んだが、目を閉じるとやけに滝音が耳をつく。それも気のせい、次第に大きくなってきて、両手で耳を塞ぐが体を伝わって来る響はどうしようもなかった。

8月24日

午前4時、突然ドカーンという響が洞窟をゆさぶった。増水だ。さらにひどくなった。われわれはこの時地底の世界で嵐を見た。誰が地底の世界に吹きすさぶ嵐を想像したであろうか。滝水の落下によって風が巻き起り、雨の如くしぶきを吹きつけ、テントは旗めき極風の間はゴーゴーと震え、落石が地面を叩き、そして地面は揺れに揺れた。われわれはただ、極風の間の水位が上昇しない事を願った。摂氏4度の水につかつては絶対に死は免れないからであった。もう誰も話さなかった。われわれは自分自身に話しかけていた。だが午前9時を過ぎたころ、幸いにも水は減り始めた。「切り抜けた」思わず歓声が口から飛び出した。しかし極風の間からアタック地点に向う途中の横穴は、

まだ水につかっているアタックすることは不可能な状態だった。

8月26日

水はかなり減った。しかしまだ先述の横穴は水につかっていた。もはやアタックを断念せざるを得なかった。それどころか、1次アタックで使用されたハシゴやザイルさえも回収できなくなった。われわれが今まで使い慣れた大切な装備を回収できないままに出洞したのは午後8時半であった。

ここに60時間の地底旅行は終わった。

8月29日

標高600メートルのマイコミ平から折からの雨の中を下山。4回の挑戦を退けた青海千里洞が誇らしげに白い息を吐き続けていた。不屈の洞窟青海千里洞。そのまわりには可憐な高山植物が咲き乱れていた。

ウサギギク、ムシトリスミレ……………。

みずしま・きよし(経済学部学生)

